2013.02.08　どんがめ文化祭初日

—ただいま開催中—

どんがめ文化祭 クマモンどんがめ趣味悠々

書・洋ラン・陶芸・絵画・写真・織・編・染・自由研究

平成２５年２月８日（金）～２月１０日（日）

１１：００～１７：００（最終日は１６：００まで）

出展者

友寄英子（書・洋ラン）　下薗　茂（陶芸・絵画）

合志徹夫（写真 花鳥）　吉岡理郎（写真 山野草）

河津堅子（織）　柿山碩子（編）

脇　怜子（編）　柴田美惠（染）

宮崎　寛（自由研究 立田山ヤエクチナシ）

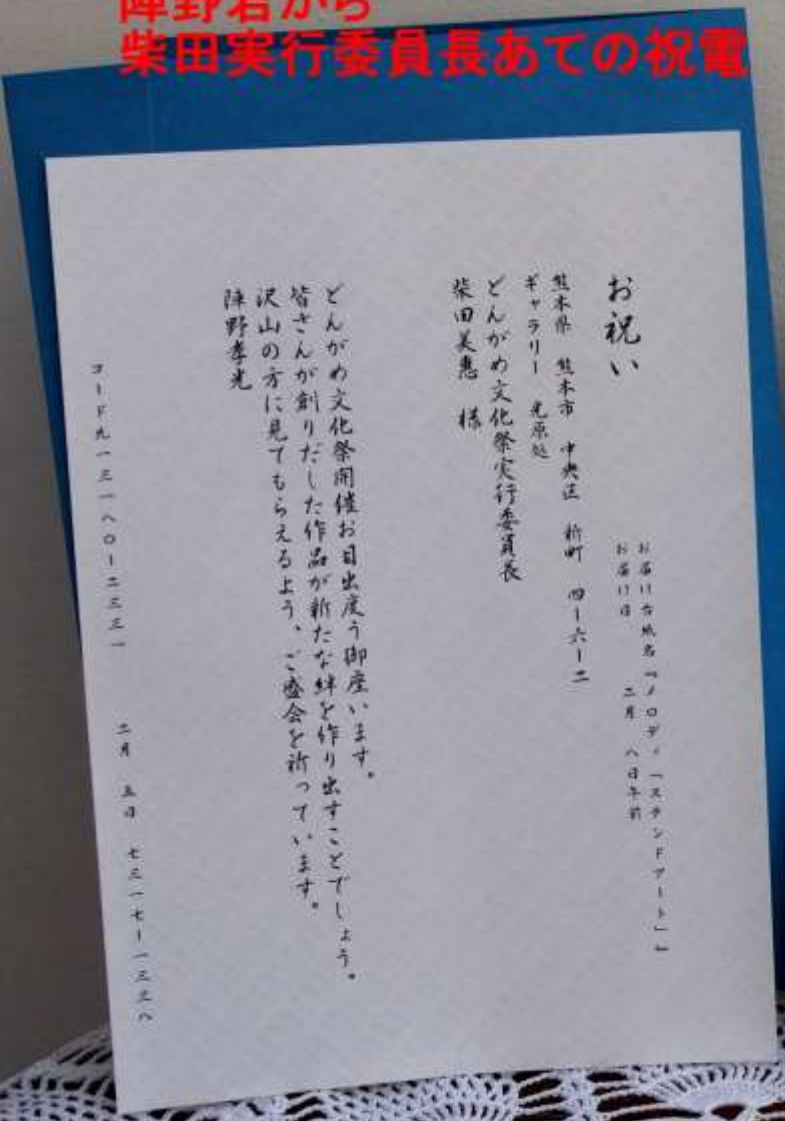
柴田さんの労作

処：熊本市中央区新町ギャラリー「光原処」

宮崎君の労作

←吉岡君
陣野君からの
祝電（メロディ付き）
↓

陣野君から
柴田実行委員長あての祝電



お祝い

熊本県　熊本市　中央区　新町　四ー六ー二
ギャラリー　光原処
どんがめ文化祭実行委員長
柴田美恵　様

どんがめ文化祭開催お目出度う御座います。
皆さんが創りだした作品が新たな絆を作り出すことでしょう。
沢山の方に見てもらえるよう、ご盛会を祈っています。
陣野孝光

コード九一三一八〇ー二三三一

お届け希望日　二月　八日午前
お届け先　メロディ「スチンドアート」

二月　五日　七三ー七ー一三三八

メロディ付き

脇さんのレース

←陣野君の祝電
下薗君の陶器
↓
←脇さんの
テーブルクロス

宮崎君と作品

（タツタヤマヤエクチナシ）

パネル1

（自生地が国定天然記念物）

立田山ヤエクチナシの復興を願って

Gardenia jasminoides Ellis forma *emilii*/*lia* Sera 1982

立田山ヤエクチナシ（TYK）井戸端会議

世話人

宮崎　寛

それは、「立田山ヤエクチナシは何が特徴なの？」、「それはどこに在るの？」と言う単純な質問から始まりました。この花木が発見されてかれこれ90年の時が流れる頃に、自生区画（国定天然記念物）に八重の花を見なくなって久しく、発見当時およびその後をご存知の方々の多くも危惧されていて、質問への満足な答えは得られませんでした。

そこで、この花木に愛着と感心を持つ有志4人で調査チーム「立田山ヤエクチナシ井戸端会議」を結成、「現存する個体と由来の把握」、「立田山ヤエクチナシに関する知見の収集とデータベース化」、「自生地などでの復興、回復、普及」に取り組むことにしました。

発足以来2年間の活動成果の概要をご紹介かたがた、この機会が、私共がまだ把握出来ていない立田山ヤエクチナシ関連情報の発掘に繋がれば幸いです。また、調査に当たっては、行政（県庁、市役所、森林総合研究所）、学術（大学、博物館）の各機関の関係者、民間個体の所有者の皆様方には大変お世話になりました。ありがとうございました。

展示内容

1　一般公開の銘木
2　年譜（生い立ちとその後の命運）
3　現存個体とその由来
4　性状
5　復興活動

パネル2

1　一般公開の銘木（熊本市の指定木保存樹）

[所在]　拝聖院庭（佐藤法道ご住職、熊本市北区室園町12-53）

[由来など]　代々のご住職に「昔から寺院内にあった」と伝承されて来たものです。現存個体の中で、立田山ヤエクチナシの学術的特徴を最も備えています。

[樹齢]　100年以上

三重を主体に二重、四重が混じります

二重：花期前半

三重：花期全般

四重：花期後半

実が成ります

二重、三重の一部

2

???? ↓

1920（大正9年）

↓

1929（昭和4年）

同年 ↓

1960頃（昭和35年）

1965頃（昭和40年）

1967（昭和42年）

1969（昭和44年）

1970頃（昭和45年）

1973（昭和48年）

↓

2010（平成22年）

現在

2020

2　年譜（生い立ちとその後の命運）

パネル3

???

立田山に自生する野生クチナシ（一重）に、突然変異による、稔性（種子をつくる能力）のある八重の遺伝子を持つ種子が生じ、実生で世代を重ねる幸運に恵まれた

高々数百年？

1920（大正9年）　浅井東一博士（第五高等学校植物学教授）が、研究試料の野生クチナシ（一重）に混じっているのを発見

■8年間の開花現地調査で2箇所に分散した8個体、東家2個を発見（突然変異がその環境への適応を試される自然選択の初期段階とみなせる）

1929（昭和4年）■「クチナシの野生八重咲株について」（短語）を日本植物学輯報、4:335-344.（1929）に発表

学名は後年（1952）東大・原寛教授が変種を品種に改定

Gardenia jasminoides Ellis Forma *oculifolia* Hara 1952

同年　■自生地内の2町歩（約20,000㎡）を国定天然記念物（以下、保護区）に指定

失われた30年

自生地では絶滅との危惧が広がる

浅井博士以降の関連情報（記録）が断無

自生地は戦時中に割れたとそし荒廃、戦後は森林化が進んだ（松根油原料として松が植栽された）

植樹者が細川家→県→森林総研と移る過程では、保護区存在の申し送りが欠落

1960頃（昭和35年）　拝聖院が、先々代以前から院庭に自生と伝えられる個体を公表

1965頃（昭和40年）　森林総研（黒髪）が実験林に保護区が含まれていることを知る

1967（昭和42年）　市が調査団（西岡鐵夫団長）を結成して立田山の捜索（花期）を開始

1969（昭和44年）　同上調査団が国定天然記念物領域の縁で1個体を発見

1970頃（昭和45年）　同上調査結果に基づき、推定保護区の一部を特別保護区として保護柵（盗掘防止）を設置（現在一部残数が残っている）

1973（昭和48年）　同上個体の健在を確認した最後（この後、盗掘され消息不明）

保護区の照葉樹林化が進み、深刻な日照不足がクチナシを駆逐している（古木は枯れ、若木は成長を止め、花が咲かない）

市文化振興課（旧：文化財課）による開花調査が継続されているが、いまだ八重の花の発見の朗報なし

2010（平成22年）　立田山ヤエクチナシ井戸端会議発足

現在

2020　発見100周年

3　現存個体（判明分約80株）とその由来

パネル4

クチナシは亜熱帯原産です

立田山にクチナシがやってきた経緯は不明です

現存個体の拡散ルート（判明分）は3−4

正系浅井

山城系（浅井系の可能性あり）

佐藤系

西岡系

凸線：挿し穂

曲線：実家（種子）

実線：挿し穂説

（浅井系は実生を含んでいるかも知れない）

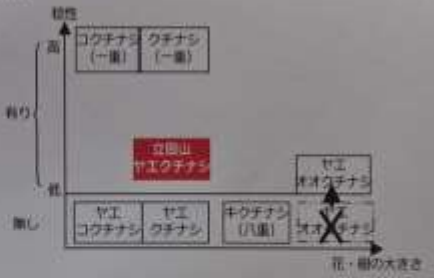
4　性状

パネル5

アカネ科クチナシ属の中での位置付け

■通常、稔性（種子が出来て実生が育つ）が無いとされる八重の梔子の中にあって稔性を有するのが稀なこととされてきました
（本会の調査活動の中でヤエオオクチナシにも稔性を確認しました）

■野生では、林床に陽が届く森林の低木です



幸運に恵まれ絶滅コースから脱出

■浅井博士に発見されるまでに、種子拡散により生育範囲を数百メートルに広げ得ました

また
■立田山には冬の野鳥（メジロ、ヒヨドリ、シロハラなど）が実を食べ糞と言う形で新天地へ運んでくれる種子拡散システムも存在しています

メジロの食み跡　ヒヨドリの食み跡

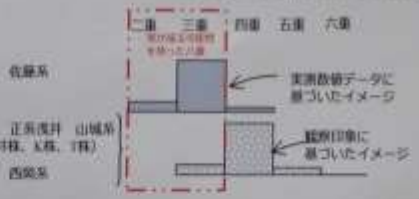
しかし、いかんせん
■二重と三重の花の一部に実が成り実生が育ちますが、種子生産数能力は普通のクチナシ（一重）の1/100です
実が成る数：1/10　実に含まれる種子数：1/10
（種子に振り向けられる筈の細胞が八重の花びらになったためと考えています）

また
■立田山は松林→原野→常緑の深い森へ大きく変化しました
（クチナシに陽が届かない）

浅井博士の目にとまらなかったら絶滅していたでしょう
（立田山の森林化速度 ≫ 種子拡散速度）
（生育環境の著しい変化）（偶然に発見されるチャンス）

花の付き方

■同じ樹上に二重-六重の花が混じる「混合咲き」です
■三重中心と四重中心の二派に分かれます
（其々のルーツ（実生株）の樹体差と考えられます）
■一年おきの豊作、凶作の波が見られます



花の構造

■八重は、花びらの重複分化、雄蕊や雌蕊になるべきものが花びらに分化したものです
■萼、花びら、雄蕊等の数は、6が基本ですが±2程度のばらつきが散見されます

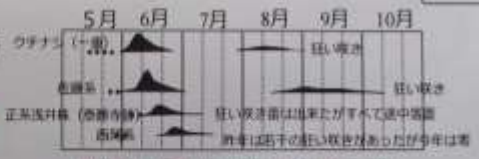
パネル6

花期（2011-12年の観察結果）と花芽形成

■一番花は、佐藤系の6月始めを頭に、各1週間遅れで浅井系、西岡系が続きます
（樹勢、気象などで1週間程度の変動が出ます）

■八重の平均段数が高くなる程遅れます
（花弁の分化成長により時間がかかる？）

■花期はいずれも約1ヶ月です



■冬を除き通年で花芽が形成される系統と秋以降に限定される系統に分かれます
（佐藤系、正系浅井株、正系浅井T株、西岡系）　（正系浅井L株、山城系）

■前者では8-9月に狂い咲きすることがあります
（花数は樹勢、気象などで等-数十輪と変動します）

開花プロセス（花の姿と色の移ろい）

花の寿命は4～6日です
見頃は開き始めから48時間以内です

開花後半になると、花びら表面が撥水性を失い、内部ではクロロシンが生成されます。雨水が溜まると黄色に発色します

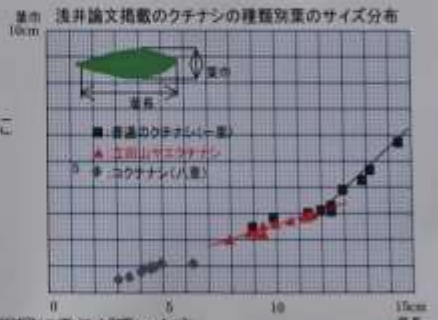
（花びらの展開の仕方には色々な傾向がありますが、詳細は別要します）

受粉の仕組み

■自花受粉と言われています（今事検証します）
■開花数日前には、既に、蕾の中の雌蕊は花粉まみれです
■花に花粉媒介者（蝶、ハナアブなど）が寄るのを見かけません

葉の形状

■ルーツである立田山の野生クチナシ（一重）に一致します
■見た目には、普通のクチナシより細身で先太に見えます



芳香

■花は甘い芳醇な香りを発し、満開時は、樹の周囲に香りが漂います

樹高

- 若木のうちは背丈が伸びますが、次第に鈍化し、頭打ちとなります
- 日当りの好い所にあっても高々3m止まりです
- 日当りが悪いと、50年を超えても数十cmがせいぜいです

樹齢

- 現存の個体では100年超が1本（パネル2）在りますが、他はそれ以下です
- 50年を越すと枯損し易くなるようです

庭木としての取り扱い

- 植え場所は、通常の庭木が正常に育っている所ならOKです（乾燥する、暑天が続くと硬くなる土は嫌います）
- 特段の病害は見たことがありません
- 虫害は、クチナシが食草のアヤニジュウシトリバ（蛾）とオオスカシバ（蛾）の幼虫に注意してください

アヤニジュウシトリバ幼虫（温暖化で沖縄辺りから北上し、近年被害が発生するようになりました）

2011年春、拝聖院で、蕾の半数以上が落ちる大被害が出ました

幼虫はつぼみ、新しい葉(こずえ)や枝幹の内部に侵入して食害するため、花付きと樹勢が悪くなります。
年2～3回発生し、1回目の幼虫は5月ごろ発生し、つぼみを落とします。2回目以降は枝先から幹の中に幼虫が侵入し、食害します。5月初旬から散水後に葉がぬれている上からオルトラン粒剤を軽く振りかけてやると、駆除と防除が簡単に行えます。幼れ枝が折れ枯り取って焼却してください。
（広島市造園建設業協会のHPより）

樹の姿が外から見えないので紹介です
本会でもまだ実験、防除法を確認できていません

オオスカシバ幼虫（緑色の大きい芋虫になり、その大食漢ぶりで広く知られています）

4～11月ぐらいまで長期間発生し、5、6世代を重ねるようです。オオスカシバに勝っては、農薬（殺虫剤）は使用せずに、見付けて捕殺することを勧めます。成虫を網で捕獲すれば一匹当たり、次は蛹（蛹化まで4、5日）をプチンと潰す。幼虫は葉上の糞を目安に上方の葉を探すのが効率的です。春～初秋の間は、放置しても、幼虫の捕食者（子育ての餌が要るアリ、クモ、ハチ、スズメなど）が活躍しますし、新枝の盛んな成長と併せて食害は部分的なものに留まり収まます。しかし、秋以降はこのバランスが崩れ食害が一気に拡大しますので補殺が必要です。下手に薬をまくと、幼虫には効かず、捕食者の方がやられて逆効果になった事例が多くあります。

移植

- 長年定植した後の移植は失敗しやすいようです
（根に走る太い根の歩くを失うためのようです）

剪定

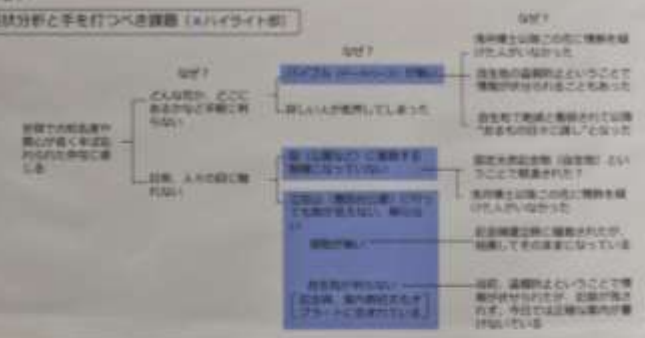
- 特に必要ありません

5　復興活動

目指す所

立田山が生んだ珍しい花木「立田山ヤエクチナシ」が、市民の植樹に愛される身近な存在となって欲しい

現状分析と手を打つべき課題（※ハイライト部）



課題解決への取り組み状況（k：完了　：取り組み中　動詞：未着手）

情報公開（外部）

立田山ヤエクチナシのデーターベース構築

1）浅井博士検證論文の完訳（2011年）
2）現存個体探しと由来の調査（第2パネル4）
3）発見以降の命運調査（第2パネル3）
4）現存個体と論文掲載性状との照合

小冊子「立田山ヤエクチナシ入門」（2012年）

5）論文に記載なき性状などの継続調査
6）実生育成による遺伝特性の観察
7）DNA鑑定による現存個体の由来の検証（調査結果の信頼性確認）

発見100周年イベント

現物の保護

一般公開個体の保全

1）立田自然公園拡張（2011年）個体群への受け入れ
樹勢森林樹木シーンバンク事業（2011年）
2）挿木開花個体の「市指定木保存樹」登録（2012年）

公共の場への植栽推進

1）農業総合公園（立田山）への植栽（2011年事業実施予定）
2）今後市などに開発を要望したいまな候補地
熊本城、市動植物園、監物台植物園、県庁、市役所、自宅、樹木の回りの歩道
3）市の公園街路樹樹種への組入れ

一般家庭への植栽推進

1）市の配布配布樹、植栽補助対象樹種に組み入れ

自生地の復活

1）自生地の環境回復（シイの大木の間引き伐採試行（森林樹木））
2）冬の立田山野鳥の種子拡散を利用した実生回復（2011年～）

Den. thyrsiflorum
× Den. bracteatilli
C. Bowen Norr
'Tiohan'
カレア
カリフラワー
Ble. Saithong Leng
'No. 1'
Lc. Dorie Beat
'Triumph'
友寄さんの作品

←橋本さんの活花（池坊）
MYANMAR
M. Ashihara
池坊
橋本順華

←橋本さんと
作品（活花）

柿山さんの作品（チュニックセーター（２点））

柿山さんの作品
（帽子２点）
帽子
柿山 様子
←河津さんの作品

柿山さんの作品
（チュニックセーター２点）
河津さんの作品
柿山さん→
柿山さんの作品
（帽子２点）
河津さんの作品
河津さんの作品

脇さんと
テーブルクロス

柴田さんの染め絵（晩夏の祭り）
のれん

柴田さんと
ローケツ染め（マツムシソウ）

柴田さんと染め絵（晩夏の繁り）
のれん

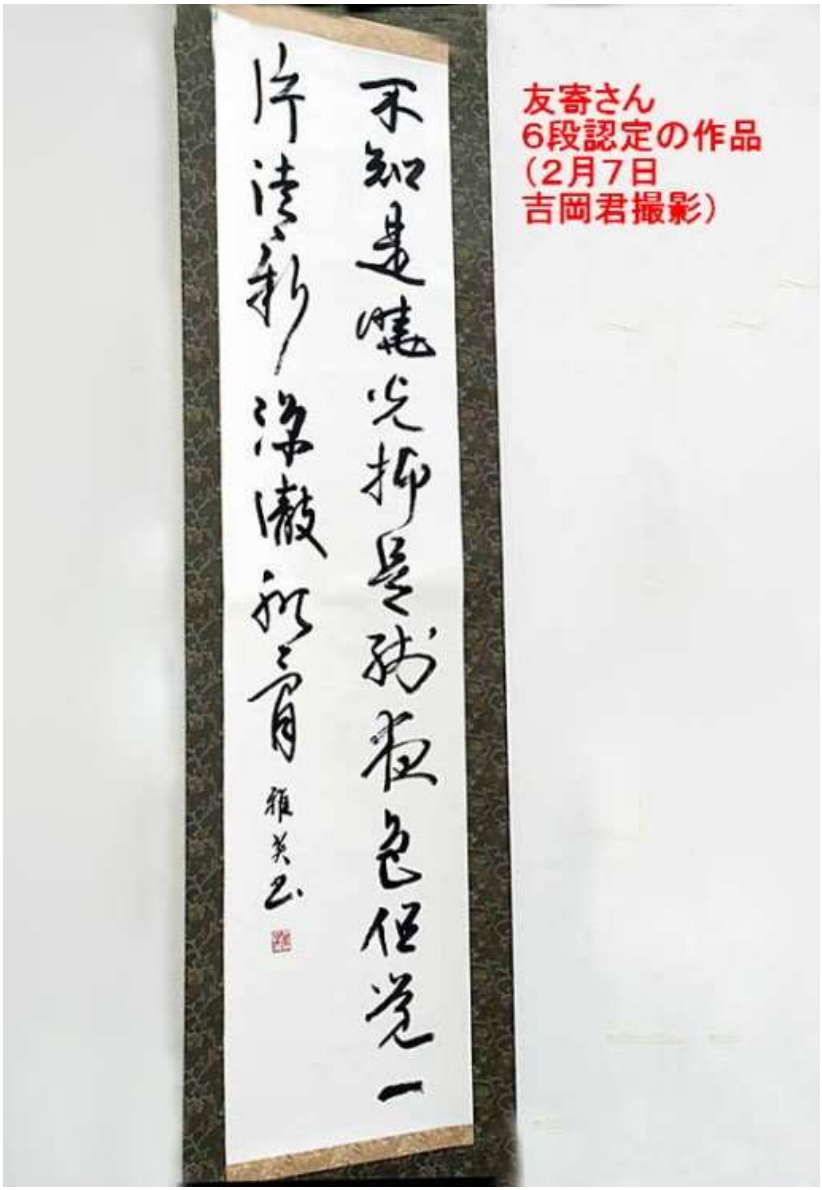
2013/02/08　光原処（こうげんきょ）

柴田さんの染め絵（晩夏の繁り）
のれん

友寄さんの6段認定作品
（2月7日吉岡君撮影）

2013/02/08
光原処（こうげんきょ）

←吉岡君の作品
友寄さんの作品
友寄さん
友寄さんの
愛弟子
2013/02/08
光原処（こうげんきょ）


友寄さん
6段認定の作品
（2月7日
吉岡君撮影）

友寄さんの作品

不知是暁光　即是残夜色　但覚一片清　新涼徹肌骨

是暁光を知らず　是残夜の色を抑む　但覚ゆ一片の清　新涼肌骨に徹す

朝かと思っておきたが、まだ夜は明けていない。ただ何かすがすがしさを感じるのは、初秋の涼しさが肌にしみるからだろうか。

友寄雅英
（英子）

下薗君の作品

下薗君の作品

下薗君の作品

吉岡君の作品

Hololeion maximowiczii Kitam. チョウセンスイラン（マンシュウスイラン）
キク科・スイラン属（花の径 3cm 程・9 月観察・撮影）
氷河期時代の生き残り～大陸系の遺存植物～
環境省：「準絶滅危惧（ＮＴ）」 存続基盤が脆弱な種に指定されています。
地本県：「絶滅危惧Ⅱ類（ＶＵ）」 絶滅危機が増大している種。

吉岡君の作品
チョウセンスイラン（キク科）

合志君の作品

まきストーブの前の
脇さん

2013/02/08
光原処（こうげんきょ）

吉岡君の作品
太極拳の先生（中）たち
←吉岡君

C組
清永（布田）さん
C組
岩尾（竹下）さん
C組
青木（中田）さん
柿山さん
脇さん
A組
中村さん
A組
大島（神山）さん

A組
大島（神山）さん
C組
青木（中田さん）
脇さん

脇さん
C組
青木（中田）さん
C組
岩尾（竹下）さん

脇さん
柴田さん
A組
大島（神山）さん
C組
青木（中田）さん

2013/02/08
光原処（こうげんきょ）
宮崎君
柿山さん
合志君
安達君
青木君

友寄さんの作品
宮崎君
小出さん
能登原さん
友寄さんの作品